

もあるから、歸化人を代表して、村政に參かり萬事都合よく運び、又學校を開いて歸化人の子弟は勿論日本人の子弟にも、英語其他の學科を教授し、且つ大村の小學校にも雇はれて、英語の教授をして居つて、同島の教育上に功勞鮮くないものである。思へば此の日東の帝國が南海の離れ島に、斯かる忠順な歸化人を有して居るのは、何等かの瑞兆であらぶ。

終りに一言せねばならぬは、由來僻陬の地や絶海の孤島は、人が注意せないもので、帝國の南關なる此の群島も、之にもれないのは實に殘念である。願くは家庭談話の材料に加へて貰いたいものであると思つて、かくもながくしく述べたのである。

(丁)

史傳

エドワード・デロンング（承前）

米

溪

夙に父を喪ひ、母の手一つに人と爲りしエドワードの、今は母さへ、亡う人となり、誰に寄るべき所もなく、獨り、行途を定めざるべからざるに至りしが、朝に、母の訓へに心を緊め、夕に、其の温かなる愛の懷に、正しき教を受けしより、心も自から化して、波間に漂ふ捨小舟の如き、今の身ながら、已か針路も過らで、智を研ぎ、道を修めん志深く、母の日頃の賜として、僅ばかりの貯へあるも、節して事に用ふるも、書購ふたに、

不自由勝なるか、エドワードは、唯、撓みなくいそしめば、年頃の誰彼よりも、業の進みも、遙かに優りぬ。

斯くて、倦まず怠らで、朝には、疾く起き出で、隣りの人の用を足し、夕には、少しの隙を見て、手に應じたる働しつゝ、已が望める、書購ふに、事足りぬへき貯しつゝ、折に觸れ、事に臨みて費を省き、用を節し、書讀む爲に、費を惜まず、只管、其の修養を勉めたり。

座して食へは、山も遂に空しかるべき、爲すなくして費せは、海も亦枯れんとす。ましてか弱き女の、僅ばかりの時、年端も行かぬ小腕の、些しの儲、將た何にかかるべき。エドワードは、遂に、衣食の爲に身を勞せざるべからざるに至りぬ。折しも、其の家に、同居せるものは、金を人世唯一

の目的として、朝より夕に至る迄、孜々として身を勞し、心を苦め、其の目的を達するは、撓まで働くに在りと信じ居るが如くなるが、エドワードも、此の間に在りて、二タ年程の歲月は、斯かる浮世の苦勞と戰ひつゝ、過しゝが、獨り、潛に謂へらく、人世の意義は、斯かるものにはあらざるべし、斯く、營々として、唯、身心を勞するのみならんには、寧ろ、水車の齒車の其よりも、淺ましき限りなり、身を修め、世に立つ、強ち、豪傑たらんと求め、偉人たらんことを願ふと、無意味なることながら、已か、世に在るに當りては、其か爲、何分にても、其の社會をして、益する所あらしめは、人たる道は盡せりとすべけれ。好き鳥は、木を撰ひて栖み、大ならんとする魚は、淵に集まる。人世の事をなす、亦、獨り田園に、悠

々、閑生涯を送るを樂むべきにあらざるべし。人
事の曲折は、都會に多く、以て、己が身を修め、
心を鍛ふよすがともなるべく、已が業を成す、便

ともなりなんとて、軽て、心を定めつゝ、都門を
出て、相當の主人を求むることし。彼や、
果して、何處を指さんとするか。

* * * * *

指し上る、旭の影を朗かに、遠山霞に置る花の香
の、折々、風に神祕を漏らす春の朝。此處ニヨーク
ヨークの某の街の一書肆に、今しも、入り來りた
る一人の少年は、讀者、既に、一年以前の秋の暮、
其の主人の腦裏に、深き印象を止めたる、エドワードなることを、察せらるゝならん。

「ハーリスさんは
主管の人、如何にも町間に、禮を返しつゝ。

「生憎來客に應接せるが、暫時、待たれよ、
幾程もなく、出來りし人の、卒然、
「オー、遇はんとて? 何、要事にても?
深き考へに、頼める人の近づけるも知らず、
に耽れるが、劇かに、顔を揚けて。

「ハーリスさん!

思はすも、聲高に呼び掛け、再び、口籠りし
が、深き感想の、湧き來りて、胸も亂れつ、往を
思ひ、今を考へては、言はん術も知らず、唯、差
俯向きつ。
真心置れる贈り物に、親切なる其の詞、思へは、
慕はしく、頼もしく、今再び、其の人の前に立ち
しは、嬉しさの、胸に満つると共に、何とやらん
心迫りて、涙さへ、さし組まれぬ。

「心清きエドワード! 今は、友を求めるとして來

りしか。好し、一人其の友はあり！

年長けたる紳士の、詞を柔かに云ひぬ。

鳥兎勿々、去來すること五霜雪、ハーリスの話
に於て、最も信用ある手代として、知らるゝもの
三人、而も人は云ひぬ。其の確實質直、深く主人
の信頼を得て、顧客の愛を受くるものは、真心を
推して、天の恵を信せる、エドワード、デロンゲ
其の人なりと。

予稿に謂ふ、我か國の家庭に於ける教は、寧ろ、
兒童に對しては、甚だ大人らしく扱ふにあらず
や、と思はる。何々するなけれ。何々すべからず
と。理を説て、解する能はざるもの、固より、止
むを得ざる所なるも、夫よりは、一層、小供らし
く、斯くあるべし、斯く試みよ、と教へて、其の

べからず、と、なけれ、に陥らしめざるを期して
は如何。禁止の詞は、其の何故を解せざることあ
るのみならず、其の爲すべき所を知らざるを奈何
せん。將た、又曰く、豪き人となれ、強き人とな
れ、と、此に於てか、兒童の理想を問へは、太閤さ
んか、義經かにあらされは、清正か、信長なり。
斯くして、其の志氣を鼓舞し、之を作興するはよ
し。唯た困る事には、着實に、鋤鍬を取りて耕す
ものなく、貞實に、店方を支配する主管たる人な
きにあらずや。志を大にするはよし。着實ならざ
るは其の弊にあらずや。蓋し、彼の英雄や、豪傑
の士は、皆之、幾百年にして、稀に相遇ふべき、
風雲に會し、以て其の羽翼を伸べたるものにし
て、決して、秩序ある社會に於て、冀ふべき所に
あらず。されば、是れ、平和の世の、眞の理想と

すべど所にあらむるべし。斯世の事は、變の如く、一舉して、大に得べきものにあらず。壹歩々々、微を積み、理を盡して、始めて成るものなれば、此の點に於ての訓育は、大に從來の、家庭の訓育に缺くる所に非ざるか。人として世にある、苟も、一毫たりとも、己か存する爲に、世に益することあらんか、以て人たるに恥ちざるべし。豊公の經綸も、一農夫の鋤犁も、其の天稟の性を盡すに於て、何の差かある。要は、各相應する事に致すに在り。これ、エドワードを傳ふる所以なり。

(完)

Sprich, was wahr ist; treink, was klar ist; isz,
was gar ist.
語るに眞實を以てし
飲むに清澄なるものを以てし
食ふに全きものを以てせよ

春風春水

雨

峰

生



幽けき天の真井より
まろび出でたる谷清水
野こえ畑こえ日もはるに
河瀬静かに馳りゆく

その河沿の橋のもと
佇むわれに語るなに
人家稀れなる村里を
離るを厭ふ情あるか